

トピックス
1. 播州日誌
2. 南国土佐を後にして 第24回



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 社会保険労務士・行政書士
 福留 章

<h1>龍馬通信</h1>	No. 80
	2024年8月号

立秋～処暑の候

毎年 暑くなっていく日本の夏
 猛暑、酷暑、熱中症警戒アラート
 温帯ではなく 亜熱帯
 地球温暖化は
 世界中に不安と脅威を与えつつ
 確実に進んでいる
 ここ数年の異常気象
 台風の強力（大型）化
 線状降水帯の発生
 ゲリラ豪雨 竜巻
 洪水 がけ崩れ 頻発する地震

愚かな人類の エゴは
 その進行を止める術を知らない

SDGs が果たして 地球を救うのか
 問題解決になるのか
 途方もなく大きな目標
 果たしてその目標達成が可能であり
 問題解決に成り得るのか
 経済大国の言い訳に過ぎないのではないか
 飾り物になっているのではないか

世界中で紛争が絶えない
 ウクライナ ガザ 南太平洋
 戦争 紛争 衝突を繰り返す国々
 それぞれが正義を叫びながら人を殺す
 戦争に正義も勝利もない
 殺戮（きつりく）と暴力
 その果ての 怨恨と恩讐（おんしゅう）
 繰り返される悲劇の中で
 親や子や友が 殺されていく

哀悼と鎮魂の季節

理不尽にも 未来を絶たれて

共生の道はないのか
 ゆずり合う心はないのか
 神秘的な奇跡のかたまりの中で
 私たちは 生命を得た
 それは不思議と言わざるを得ない

大いなるもの（神・・・）は
 その奇跡的な命を
 奪い合うことを 教えたか
 知恵を持つ人類の勝手な暴走

大宇宙の
 かすかな揺らぎの中で生じたこの時代が
 あらたな揺らぎの中で
 消滅してしまうかもしれない

大自然への畏敬が
 人類を救う
 ものみな繁茂する 燃え上がる季節
 若さが爆発する季節
 日本ではこの季節に
 哀悼と鎮魂の季節が交錯する
 ヒロシマ ナガサキ原爆忌 終戦記念日
 盂蘭盆会（うらぼんえ）精霊流し
 故人をしのび
 今生きてあることを噛みしめ
 一日一日を
 限りあるものとして
 慈しみ 喜ぶことが
 生きる力となる





播州日誌

パリ・オリンピック 2024 開幕

世界的に有名な三色旗はトリコロールと呼ばれる。フランス国旗は鮮やかな青・白・赤の三色で「自由」「平等」「博愛」を表している。国家理念と現実のはざままで呻吟するフランスではあるが、100年ぶり3回目の五輪開催を一つの国家事業として開催運営することにより、分断と不平等を解消し、美しく強い国フランスを再現しようという企図と意気込みを感じる。

厳戒下、予想外の雨の中で開会式が開催された。史上初めて屋内のスタジアムを飛び出し市内全域を使っのパフォーマンス。度肝を抜く演出の数々、次々に繰り出されるサプライズの連続に、30万人ともいわれる観客は固唾をのんで見つめ酔いしれた。感動の嵐。そして熱気は降り続いた雨をもものともせず、その熱気が冷めることはなかった。

逆風の中での五輪と言われた。東京大会後の汚職の発覚、スポンサーの撤退。金権体質にまみれた五輪の在り方は世界中の批判の的になり、世界中の人々の「五輪離れ」を顕著なものにした。また紛争地帯の戦火は消えることなく続いていた。国際社会の分断は大会に暗い影を落としていた。ガザは危機的な状況にある。パレスチナはイスラエルの除外を申請したがIOCに却下された。ウクライナに侵攻したロシアは国家としては認められず、個人の中立選手(AIN)として15人のみにエントリーが許された。同盟国であるベラルーシーの選手とともに船上パレードへの参加は禁じられた。ウクライナは史上最低の選手派遣。暗雲立ち込める世界情勢の中で、フランスは確固たる決意をもってあらゆるタブーに挑戦し続けた。絢爛豪華でお洒落だった開会式そのものが、平和を希求する多くの人達の心の叫びでもあった。現にテロはあった。高速鉄道組織への放火事件は交通網を一時マヒさせた。警察を始め多くの公務員が動員され、軍隊までもが警備の任に当たっているとされている。

開会式のパフォーマンスが多ければ多いほど、テロのリスクは高くなる。当局はそれを承知で強行した。賛否両論あったことは容易に知ることが出来る。フランスは国家理念の一つの実現の象徴としてこのような開会式を挙行したものと思われる。

史上、類を見ないセーヌ川を使っの船上パレードによる選手入場。200を超える国と地域の選手たちは大小さまざまな85隻の船に分乗して6kmを優雅にパレード。川の流れに沿ってテーマごとにパフォーマンスを展開。歌と踊り。パントタイム。歴史を背景としたオペラ。マリーアントワネットの首のない絵画は何を意味するのだろうか。革命で流された同じ色の血が建物の壁を伝ってセーヌ川に流れた。イタリア出身のアメリカ人レディ・ガガが歌い演技する。セーヌ川沿い



の多くの名所が華やかな演出に彩られた。エッフェル塔はレーザー光線と照明で多くの人を驚かせた変幻自在のパフォーマンス。個人的に一番感動したのはそのエッフェル塔の中段付近で、セリーヌ・ディオンさんが熱唱した「愛の賛歌」。見るもの聴くものの琴線に触れつかんで離さない。世界中の「あなた」へのメッセージであった。

クライマックスは聖火リレー。引き継がれ乗り継がれてきた聖火は、最終ランナーの男女二人の金メダリストによって点火された。聖火台を釣り上げている気球が少し上空に上がり空中に浮かんだ。見事な演出だった。

五輪は戦争のない平和の象徴と言われる。開会式の後には選ばれた選手たちが、鍛錬した身体と精神をいかに発揮して競技にしのぎを削ることになる。勝者には賞賛と拍手を、敗者にも拍手を。大会が盛り上がり成功することが真に平和を希求する人々の願いである。平和の尊さを世界中に発信することが、パリ・オリンピックの大きな使命でもある。

2024. 7. 28

第12回

社労士 野口 亮 がゆく

社会保険の適用拡大



老人介護施設の事務長から電話連絡。「10月からの社会保険適用拡大の対象事業所にあたると思う。その準備に入りたいので一度訪問して欲しい」「それでは明日午後に訪問することにしたいと思います」短い会話の後で、野口はふっとため息をついた。昨年が続いて今年も1～2件対象となる事業所がある。

最近の最低賃金の急上昇、今年も50円の予定。育児制度の拡充、社会保険の適用拡大といい、中小零細企業ではその負担増に苦慮している。法である以上守らなければならないのは承知の上だが、商取引での大手の有利性は簡単に解消できるものではない。

収入減・支出増では財政的に弱い中小企業の負担感は強い。

翌日の午後施設を訪問する。介護施設では今なおコロナの脅威が残っており、マスクの着用を強制している。何時ものように玄関口で消毒、検温の後応接室での面談に入る。

51人以上という人数要件は現時点での被保険者の人数による。ギリギリだけれど対象事業所にあたるのが分かった。事務長の恨み節を聴きながら10月からの拡大対象の人数を聴く。10名程度という。

まず早めに対象者と個別に面談の機会を持ちヒヤリングを実施して、選択肢を示し意向を尋ねる事。今のままでは強制加入となるので、労働時間を短くして対象から外れるか、今のままの時間数か又は条件変更で労働時間を長くするかを選択させる。まずこの作業を実施して10月の適用に備える。「大変だ、大変だ」を事務長は繰り返していた。

扶養範囲で働くことに慣れているパートにとって意識改革は難しい。カベ問題もすっきり解決したわけではない。来年度以降には人数要件を撤廃し、パートの社会保険適用拡大を推進するという。苦しい中小企業の恨み節が、今しばらくは続く。野口は大きなため息を一つついて、帰途についた。



夏季休業のお知らせ

当事務所の益休みは8月14日(水)～8月15日(木)までです。
なお緊急の場合には、090-1961-9588までご連絡下さい。

～南国土佐を後にして～

第 24 回 「東京編」 帰郷

南国土佐を後にして 7 年の後、父の病気を機に高知へ戻った。兵庫県稲美町に本社のある新関西衣料サービス（株）の高知営業所に就職。父がクリーニングの取次店を経営する傍ら同社の一事業部であるダストコントロール（リースキン）の高知営業所を任されていたのを引き継いだということになる。小さな家だが店舗付き 2 階建ての住宅と、営業・配達用の車が与えられた。給与もそこそこで親子 3 人暮していくのはそう難しいことではなかった。所長兼営業担当ということで時間が自由であったこともよかった。昭和 48 年 11 月のことであった。それは高知に帰郷してから 2 年目のことだった。46 年 9 月 5 日に長男康博が 47 年 9 月 8 日には長女史子が家族に加わった。家族 4 人の未来のために心機一転頑張ることになった。妻は骨身を惜しまず働く人であった。子供 2 人を育てながら私の仕事をよく手伝ってくれた。当時父が抱えていた借金も二人の力で完済した。会社も実績を認めてくれ昇給、昇格は毎年のようにあった。

ダストコントロールの中で「ロールタオル」という商品があって、キャビネットはリース。中の手拭き用ロールタオルを洗濯してはサプライする仕事があった。洗濯の方は父が懇意にしていたクリーニング店で洗ってもらった。幅 30cm 長さ 30～40m 程もあるタオルを、始めは手巻きで製品にしていた。専ら彼女の仕事で、康博をカゴの中に入れ史子を背に負ってタオルを巻き続けた。お陰でロールタオルの貸し出し件数が増え売り上げが上がり、手巻きから自動巻き（機械）に変わった。主にホテルや病院、レストランの洗面所に設置する。素人ながら壁に穴をあけてビス止めする。あるレストランで手元が狂って壁に大きな穴をあけてしまい、契約解除どころか損害賠償をさせられた。リースキンのマット、雑巾、ロールタオル、サニタリー商品の販売が伸び売り上げはどんどん上昇した。



店舗が手狭になってきたので会社の許可を取って、2 倍ほどの店舗付き住宅に転居した。時を同じくして本社で火災があり、事務所を残して工場を全焼するという災禍にあった。一時は再起不能とまで言われたが奇跡的に立ち直り、翌年 55 年 4 月には新工場での操業にこぎつけた。順風満帆かに見えた高知営業所も暗転し、運命の歯車は大きく動いた。

本社のリネン仕入先の商社の意向もあり、高知営業所は譲渡し岡山営業所を開設することになった。当然のように私に岡山営業所所長への昇格と岡山への移転の打診があった。

子供はまだ幼く、父のもとを去るのは断腸の思いではあったが、破格の条件は魅力的ではあった。事務所はマンションの下駄ばき部分、住居は 3 階の一室今よりは 3 倍以上広い。営業用の車も、もちろん無償貸与されるというもの。

熟慮の末、内示を受け入れ岡山行を決めた。再び「南国土佐を後にして」県外に転出することになった。昭和 55 年 5 月のことであった。兄弟が高知に戻っていたこともあり、父母のことは任せることになった。高知での生活は 7 年ほどで終わった。大きな変化の予兆があった。子供たちの為にも、妻の為にもそれは大きな決断であった。自分の生きていく道は自分で切り開いていかなければならないと思った。



長らくご愛読いただきました「南国土佐を後にして」も最終回ということになりました。その間多くに皆様から励ましの言葉を掛けていただきました。この稿の筆を置くにあたり心からの感謝の意を表します。ありがとうございました。